

土地の古層の発掘／古層からの召喚 藤井雅実

そこが巨大な都市でも山奥の密やかな村でも、その場所特有の時の経過と蓄積がある。

そこには、はるかな時の彼方からの、無数の人々の営みが、その幸不幸や喜怒哀楽の感情の波の跡が、刻まれている。

滝野川クロニクルという名を持つローカルなアート・イベントは、その滝野川という土地に潜む、今日の日常に隠された様々な情景を喚び覚まそうとして、その試み自体の歴史を育んできた。地域アートという奇妙な言葉が今世紀に入ってアートの一部門の呼称のようにも広まり、その部門の名自体もまた、是非様々な議論を喚び覚ましてもいる。そうした呼称の枠もまた、地名を冠したイベントに伴う課題として新たな憑き物として憑きまとう。

滝野川クロニクルもまた、それも含め、その土地を育みまたそこに潜んで憑く多様な現実や意味やイメージを、その錯綜して重なり合う古層の系譜を読み出して、古層に隠れた像や象徴系の考古学ともなっていく。そしてその時、そこには、この滝野川という固有名で指示される場を織り成している、異郷の他者とその異質な地・知との縁もまた、新たな層で喚び出される。時が育む空間には、常に既に、近隣からはるか彼方の地の像や意味や現実もまた、様々に重なり合い錯綜して蠢いていたのだから。

ウイルスという微細物質の他者が世界を覆い、またその逆の、グローバルなネットという非物質の他者の網が世界を覆い、そこに人間だけが行う戦争が、人間の命や生活だけでなく動物や植物の無数の命も破壊する、危うい状況に包まれた今日。滝野川を囲む地は、かつての異国の人々との悲しい争いやそこへの抵抗の痕跡も潜み、他方また、清らかな川と河川敷の木々の周囲に育まれた人々の長い営みの歴史も持つ。この土地の、その系譜と古層の発掘が、この不穏な時代に、希望の表徴を喚び醒まそうとする。